



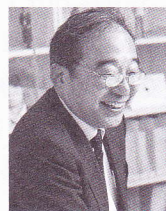
統計から社会の実情を読み取る

第167回 成人スキルの国際比較 2022

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る 日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか：統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



知力トップクラスの日本人

子どもの国際学力テスト (PISA 調査) に対して大人の国際学力テストとも言える成人スキル調査 (文科省の命名では国際成人力調査、略称は PIAAC 調査) が、同じく OECD (経済協力開発機構) によって実施されている。

成人スキル調査は、2011 年の第 1 回調査に続く 2022 年の第 2 回の結果が昨年公表された。第 1 回調査の結果については本連載でも 2014 年 5 月号で紹介したが、10 年以上経過した新データなので前回との比較を含めて、再度、今回紹介することとする。

第 2 回調査には 31 カ国・地域から約 16 万人が参加した (1 カ国・地域当たり 5,200 人程度)。日本では 5,165 人が参加。住民基本台帳から無作為に抽出された日本国在住の 16 歳以上 65 歳以下の個人を対象に、2022 年 9 月～2023 年 4 月にかけて実施された。

図 1 には、最も基本的な結果である平均得点について参加各国の結果を示した。

テストは、「読解力」と「数的思考力」、及び「状

況の変化に応じた問題解決能力」の 3 科目にわたっていた (前回の 3 番目は「IT 活用力」)。「読解力」は国語、「数的思考力」は数学に当たり、「状況の変化に応じた問題解決能力」は「指定された条件を満たす商品を、価格や在庫の変化に応じて適切に選択する」あるいは「複数の人のスケジュールを、当日の予定や会場の都合の変化に応じて適切に調整する」といった能力である。

日本の結果を順位で見ると「読解力」と「数的思考力」は前回の世界 1 位が、いずれも、フィンランドに次ぐ第 2 位となった。今回はじめての「状況に変化に応じた問題解決能力」はフィンランドと同順位 1 位だった。

前回のように「日本人は世界一頭がいい」とは言えなくなったが、世界トップクラスの知力を日本人が有するという結果だったことには変わりがない。

なお、知力調査と呼ばずに成人スキル (Adult Skills) 調査と呼んでいるのは、単なる学力調査でなく、世の中を渡っていく知的な能力の調査という意味を込めているというのが公式見解

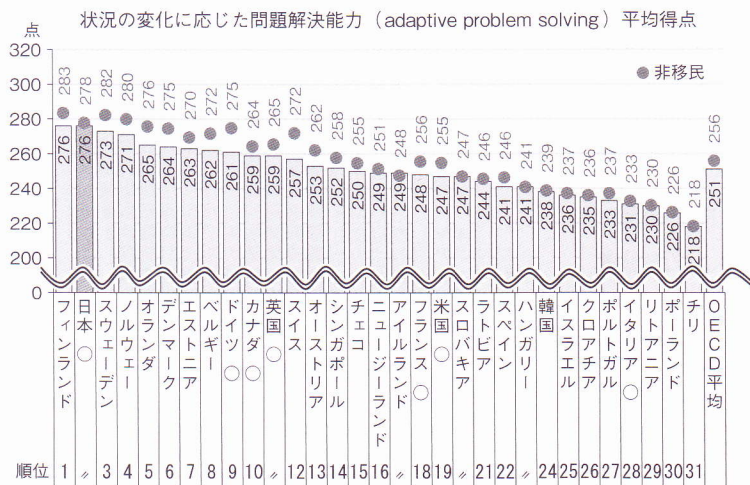
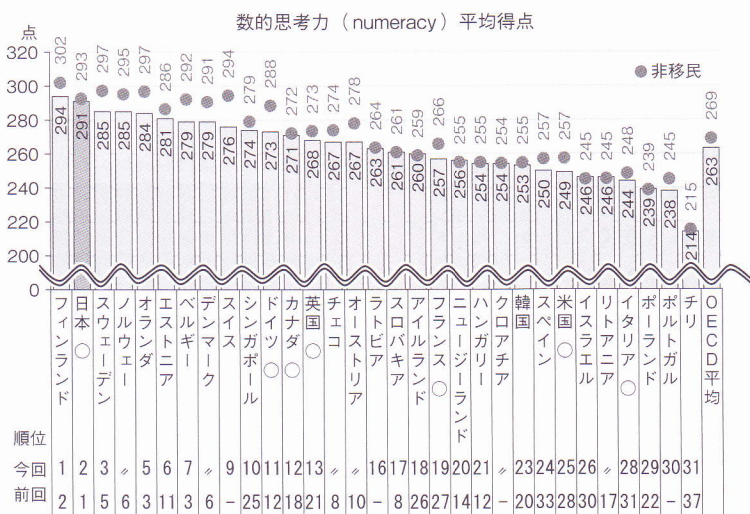
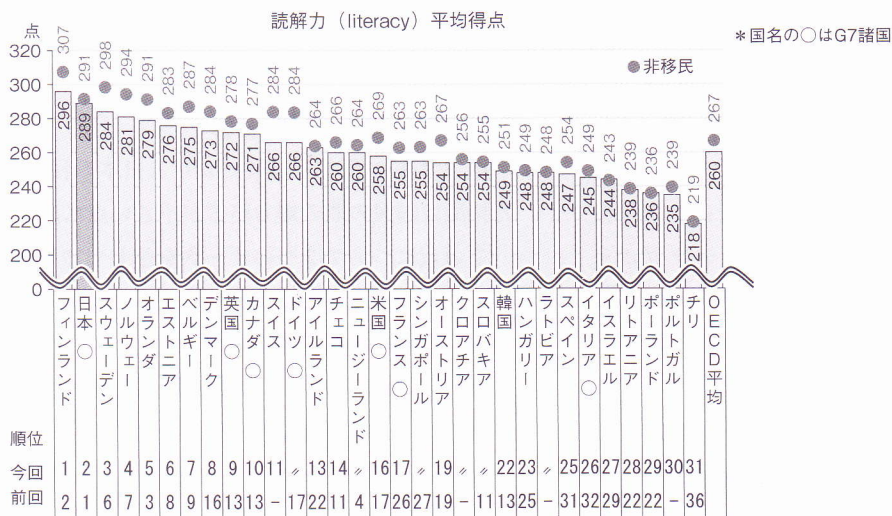


図1 成人スキルの国際比較 (2022年)

注) 前回は2011年調査の順位。英国はイングランドのみ。ベルギーはフランドル地方のみ。非移民は親も本人も自国生まれの者。

資料) 国立教育政策研究所「OECD国際成人力調査(PIAAC)第2回調査のポイント」、非移民の平均得点はOECD Survey of Adult Skills 2023, Table A.2.10.

だが、知力調査と呼ぶと生じる可能性がある毀誉褒貶のトラブルを避けるためでもあろう。

順位の全体的特徴を見ると、日本を除いて、北欧で高く、南欧や東欧で低いという一般傾向が認められる。また、PISA 調査による学校生徒の学力の結果を比較すると、シンガポールや韓国を含む東アジアでは学校生徒の好成績と比較して成人力は日本を除いてそれほど高くない。

読解力と数的思考力について前回との比較を順位の変化で見てみると、北欧諸国や英国、アイルランド、フランス、スペインで順位が上昇、韓国、東欧などで順位が低下しているのが目立っている。

成人スキルの3科目の順位を主要先進国(G7諸国)で比較してみると、日本人は読解力では2位の英国、数的思考力、問題解決能力では2位のドイツをかなり引き離して、紛れもなくトップである。ドイツは数的思考力が読解力を上回り、逆に、米国では読解力が数的思考力を上回る傾向があることにも気づかされる。

欧米の場合、移民を除くと結果がかなり違うという点は、誰でも気になることなので移民を除いた平均点もグラフに付加した。

前回2011年には、自国生まれでない者(移民)を除いても読解力では日本は相変わらず1位であったが、数的思考力では、移民を除くとスウェーデンに次ぐ第2位という結果であった。移民の影響はこの程度だったということが分かる。

今回は、かなり状況が変化した。移民を含んだデータだと、日本の順位は読解力、数的思考力、問題解決能力が、それぞれ2位、2位、1位であったが、親も本人も自国生まれである非移民ベースだと4位、6位、4位とかなり後退する。日本は移民をほとんど受け入れていないので成績がよかったという側面がクローズアッ

プされてきているのである。

知力格差の小さな日本

成人スキル調査の結果における日本の目立った特徴は国民の間の知力格差が小さい点にある。

この点について2つのデータを示しておこう。

1つはOECDの報告書でも取り上げられているレベル毎の習熟度分布である。

OECDの成人スキル調査の結果については、平均点とともに得点を区分した習熟度レベル(Proficiency level)で評価されている。「読解力」と「数的思考力」は、6段階(高い順に、レベル5からレベル1、レベル1未満)、「状況の変

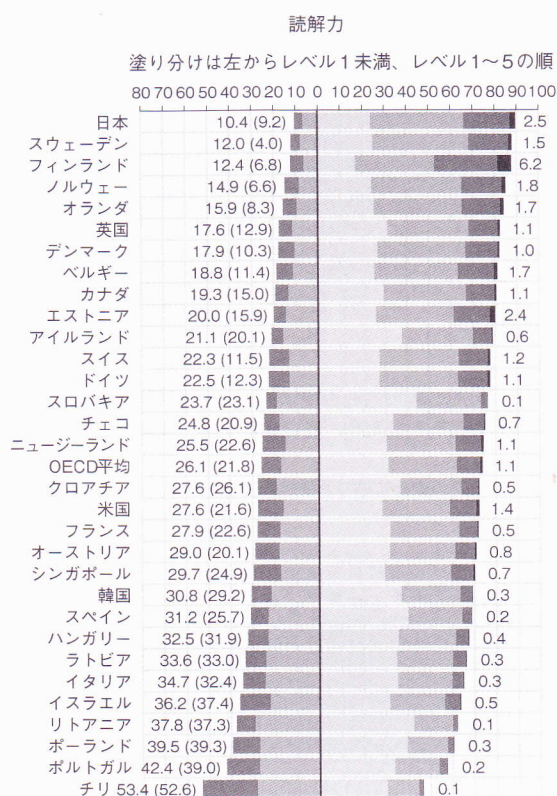


図2 成人スキルの国際比較:習熟度レベル分布(2022年)

注) 左の数値は、レベル1以下の構成比(カッコ内は非移民)、右の数値はレベル5の構成比。英国はイングランドのみ。ベルギーはフランドル地方のみ。非移民は親も本人も自国生まれ。

資料) OECD Survey of Adult Skills 2023, Table A.2.2 (L), A.2.10 (L)

化に応じた問題解決能力」は、5段階（高い順に、レベル4からレベル1、レベル1未満）で評価されている。

ここでは読解力について結果を示した（図2参照）。

3科目いずれも、低い習熟度（レベル1以下）の割合は参加国中最小、高い習熟度（レベル4以上）の割合は参加国中第2位（第1位フィンランド）となっている。

つまり、高い知的レベルも少なくないが、むしろ、低い知的レベルが少ないのが、世界の中で目立った日本の特徴と言えよう。OECD報告書と同じ描き方の図2のように、レベル1以下とレベル2以上をプラスマイナス方向に左右に書き分け

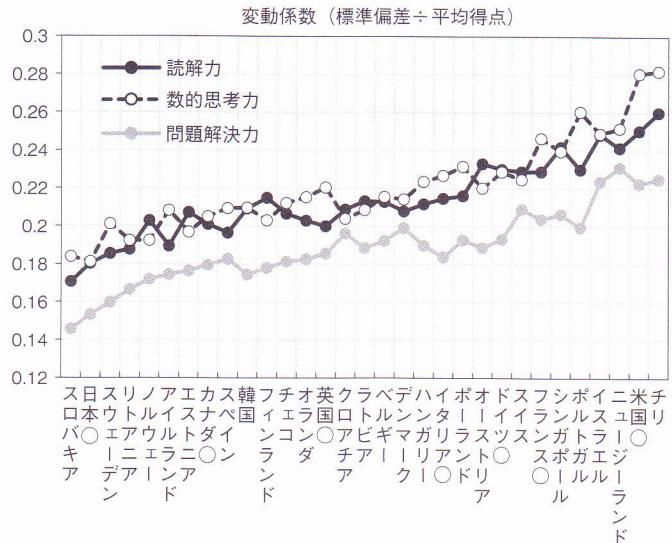
たグラフではその点が特に強調されている。

最高のレベル5の構成比を確かめると、読解力では日本は2.5%とフィンランドの6.2%を大きく下回って2位である。数的思考力では日本は3.5%とフィンランドの5.3%、オランダの4.2%に次ぐ3位である。

図1で見たように、平均得点のランキングでは日本がフィンランドに次ぐ第2位（問題解決能力では同順1位）であるが、フィンランドが日本を上回っているのは、最高レベルの知力保持者が多いからであることが分かる。

レベル1以下の構成比について、移民の影響を取り除いた結果数値を調べてみると、日本が最少というイメージは大きく崩れる。非移民の同値は、読解力では日本は9.2%とスウェーデンの4.0%、ノルウェーの6.6%、フィンランドの6.8%、オランダの8.3%を下回る5位に過ぎない。

*国名の○はG7諸国



知力ばらつき小さい ← 変動係数3分野平均 → 知力ばらつき大きい

図3 知力のばらつき度合

注) 英国はイングランドのみ。ベルギーはフランドル地方のみ。
資料) OECD Survey of Adult Skills 2023, Table A.2.1

すなわち、日本の知力レベルが低い方が少なく、全体として底上げされているのは、ヨーロッパのように移民を多く受け入れていないからに過ぎないという側面が大きいのである。

もう1つのデータは、得点分布のばらつき度合いを示す変動係数である（図3参照）。日本はスロバキアに次いで知力のばらつきが小さい国であることが分かる（数的思考力では最もばらつきが小さい）。G7諸国の中では、2位のカナダを引き離してばらつきが小さいのが目立っている。G7諸国の中では米国の知力のばらつきが最も大きく、フランス、ドイツがこれに次いでいる。

米国はノーベル賞受賞者が最も多いことにもあらわれているが、優秀な者が多い。しかし、逆の方向の者も多いため平均点はそれほど高くないのである。日本はその正反対であることがデータで示されていると言えよう。